

図書館に付置する（平成12年度以降も同様）。（2）研究協力体制を整備し、外国の研究機関・研究者からも協力・情報提供を求める。（3）ビザンツ古典（写本、批判的校訂本）のサーヴェイを行い、欧米における既存のビザンツ古典分析法を批判的に再検討しつつ、各古典史料についての解題の作成に着手する。（4）重要度の高い古典については、個別分析（写本状況、成立の背景、内容分析等）を開始する。（5）分析・研究作業の成果は、本特定領域研究のメディア等を通じて随時公表する。また、コンピュータ利用による情報の整備方法についても、他の計画研究代表者との連携の中で検討する。

B02 中世における外国文化の受容と展開

研究代表者 木田 章義
京都大学大学院文学研究科 教授

研究分担者 鈴木 広光
九州大学文学部 講師

研究目的

本研究では、中世のキリシタン資料、朝鮮資料、中国資料を扱う。これらの文献がどのような背景と歴史的経緯の中で編纂されているのか、どういう性格の文献であるのか、編纂の意図は何であるのか、そしてその内容はどのようなもので、どのような態度で翻訳、もしくは編纂されているのか、などという点を明らかにし、同時にそこで用いられた日本語の問題も検討してゆく。つまり本研究では、これらの資料群をどの分野でも正しく利用できるように、文献学的な総合的、且つ、基礎的研究を行う予定である。

具体的には、朝鮮資料は、李氏朝鮮で編纂された文献を中心に、試訳館での和学の位置や苗代川資料も含めて、分析してゆき、中国資料は、倭寇の猖獗によって、日本研究が盛んになった結果、編纂された日本研究書を中心に据える。キリシタン資料についても、膨大な資料群があり、これら全体を対象にすることは不可能なので、重要でありながら、ほとんど研究されていない「パレト写本」を中心にして、ドチリナや辞書など、関連する所を、有機的に結びつけつつ、研究を進めて行く予定である。これらの基礎的な研究のあと、文献そのものの読解を進めて行き、より深い内容把握を目指す。特にそこに用いられた日本語の性格、特色などに注目して行く予定である。

研究計画・方法

朝鮮資料は『捷解新語』『方言集釈』を中心として、

朝鮮資料の背景、李氏朝鮮の試訳院の中での和学の位置、日朝関係の実態、文禄の役で日本に拉致された朝鮮人の問題、苗代川に残る朝鮮資料の検討などそれぞれのテーマについての文献のリストを作る。

中国資料では『日本一鑑』『日本考略』を中心にして、中国資料の背景、明、清時代の倭寇の現状、中国南方の海防政策と中央官僚の意識の問題、南方商人たちの日本との交易の実態などについての文献リストを作る。

キリシタン資料では、「パレト写本」を中心にしてキリシタン資料の背景、イエズス会の講義の内容や構成、宣教師の日本語の水準とその編纂物、宣教師のローマに送った書簡、イエズス会の宣教方針、禁令後のイエズス会の活動などについての文献リストを作る。同時に、「パレト写本」の翻訳原典となった聖書の探索も行う。

これらの文献については、パソコンに入力して基本データを作成し、公開する。

B02 キリシタン文献の文化横断的研究

研究代表者 米井 力也
大阪外国語大学外国語学部 助教授

研究分担者 エンゲルベルト・ヨリッセン
京都大学総合人間学部 助教授

研究目的

キリシタン文献には、日本文化がはじめて西洋文化と接触したときに生じた軋轢や融合の様相がはっきりと刻印されている。その点で、聖書や聖人伝に代表される西洋の古典の日本における伝承と受容の典型と考えられる。しかし、キリシタン文献の分析のためにはラテン語・ポルトガル語・スペイン語等で記された原典との対照が不可欠であるため、研究があまり進んでいないのが現状である。

本研究では、日本における西洋の古典の伝承と受容の一環としてのキリシタン文献を、言語・文化・歴史の横断的な視座から総合的に分析することを主眼とする。キリシタン文献ならびにその原典の収集と対照、ヨーロッパ人宣教師や日本人キリシタンが直面した異文化間の軋轢等の実証的分析、大航海時代のヨーロッパと日本の歴史的な位置、江戸幕府の迫害によって潜伏せざるを得なかったキリシタンによるキリシタン文献の変容など多角的に研究する。また、同時に、従来一部の研究者しか触れることのできなかったキリシタン文献をデータベース化することによって、研究を深めるための基礎とする。

研究計画・方法

平成11年度は、キリシタン文献の分析のため、ノートパソコンによるインターネットなどの通信技術を駆使して国内外の図書館等公共機関から情報を収集すると同時に、関連図書の購入・文献複写・マイクロフィルムからの焼付等によって収集した資料をデータベース化することによって、共同研究の幅を広げるための基礎を作る。「設備備品費」にノートパソコン、「その他」に複写費、現像・焼付費、通信運搬費を計上したのは、上記の計画のために必要と判断したからである。

研究代表者は、キリシタン文献の翻訳方法について、原典との異同を明確化し、研究分担者は、大航海時代の修道会と日本について、文化・歴史の観点から比較検討する。そのうえで、両者の研究を総括的にまとめるために、E-mail等によってデータを共有しつつ、日常的な連絡を緊密にする。

B03 『シャーナーメ』の伝承とイラン人意識の形成

研究代表者 羽田 正
東京大学東洋文化研究所 教授

研究分担者 柘屋 友子
国立民族学博物館 助手

研究目的

(1) 『シャーナーメ』に見られる古典的な「イラン人意識」と近代的なイラン国民意識の関係の解明。

『シャーナーメ』に見られる古典的な「イラン人意識」が、近代西欧に源を発する「国民意識」とどのような関係にあるかを考察する。『シャーナーメ』におけるイラン人意識とはいかなるもので、それは歴史の中でどのように表象されてきたものなのかを明らかにする。

また、今日のイラン国内でペルシア語を常用語としない人々（トルコ系、アルメニア系など）にとって、ペルシア語の古典『シャーナーメ』はどのような意味を持つものなのかを明らかにする。

(2) 美術史における『シャーナーメ』の位置の研究。

『シャーナーメ』の挿し絵入り写本の所在を確認した上で、整理、分類作業を行い、『シャーナーメ』を美術史的に研究する際の基礎的なデータを作成する。タイルを含む陶器、金属器に引用された『シャーナーメ』の詩句や造形表現を統計的に調査し、それらが美術品自体にとってどのような意味があるのかを考える。

以上二つの研究を組み合わせることによって、『シャーナーメ』の総合的な研究を行なう。

研究計画・方法

- (1) 現存する『シャーナーメ』の写本の調査をイランと欧米で行い、その主要なものはマイクロフィルムの形で取り寄せる（羽田・柘屋）。
- (2) 『シャーナーメ』の刊本各種を購入し、写本マイクロフィルムと比較しながら、その読解や分析を開始する。（羽田・柘屋）
- (3) 主としてイランで『シャーナーメ』の詩句の記された美術品を調査し、そのデータを収集する（柘屋）。
- (4) パリ国立図書館のペルシア語関係司書F. Richard氏を招聘し、写本関係の研究会を開く。

B03 近現代社会における西洋古典学の継承 フランスにおける文学研究と文学史の成立

研究代表者 中川 久定
京都国立博物館 館長

研究分担者 多賀 茂
京都大学総合人間学部 助教授

研究目的

- (1) 文献学に基づいていた16・17世紀までの西洋古典学の中心的流れは、近現代社会において、文学研究と文学史（両者を総称して、広義の文学研究と呼ぶこともできる）に形を変え、その結果、新たに両者に分岐・包含されつつ継承されることになった。本研究の目的は、上記の歴史的過程を明らかにすることにある。
- (2) 西欧近現代社会における広義の文学研究の2大分野 狭義の文学研究と文学史 の成立と発展の過程を、西洋古典学の継承という視角に立って統合的に究明しようという研究は、これまでなされてこなかった。本研究は、この大きな欠落を埋めようとする恐らく初めての試みである。
- (3) 18世紀以降の社会において文学研究と文学史が明確な形で分岐してくる以前の近代（16 17世紀）古典学の状況に関して、明確な問題意識と方法論をもって、初めて接近したのは『雄弁の時代』（初版、1980年：第2版、1994年）のマルク・ヒュマロリであるが、私たちは、ヒュマロリが修辞学の歴史という視点によって包括的な見取り図を与えた16 17世紀に続く時代に、広義の文学研究がどのように変質して行ったかをたどろうとするものである。
- (4) 本研究は、中川がこれまで進めてきた18世紀第3・4半世紀における百科全書派とカトリック神学者との論争に関する研究、および多賀のベネディクト会士の文学・文学史関係書簡の解読の成果に立脚し、そこから出